

各関係機関の長 様

福井県農業試験場長

農作物病害虫発生予察予報の送付について

このことについて、下記のとおり発表しましたので送付します。



連絡先 福井県農業試験場病害虫防除室
TEL 0776-54-9315
FAX 0776-54-5106
E-mail byogaichu-boujo@pref.fukui.lg.jp



福井県病害虫防除室

令和8年農作物病害虫発生予察予報第2号

4月の気象概況

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は高い見込み、降水量は平年並か多い見込みです。

[水稲関係]

病害虫名 ばか苗病

1 予報内容

発生時期：発病最盛期は4月下旬

被害程度：少発、局中発

発生量：育苗期の発生量は、平年よりやや少、前年よりやや多

2 防除対策および防除上の注意点

(1) 購入種子を使用する。

(2) 未消毒種子を用いる場合は、消毒前に比重選を行うとともに、浸種前に種子消毒を必ず行う。

(3) 薬剤による消毒後は十分風乾し、糊に薬剤を固着させる。タフブロック湿粉衣後、風乾する場合は直射日光や極端な高温を避ける。

(4) 浸種は、10～15℃で行い、河川水など病原菌の混入の恐れのある水は使用しない。

(5) 薬剤による消毒種子は浸種開始から3日間は換水をしない。

(6) 薬剤の残液は、河川や池などに流さず、適正に処理する。

(7) 温湯処理による種子消毒は処理温度と時間を厳守する。

病害虫名 いもち病（苗いもち）

1 予報内容

発生時期：初発は5月上旬

発生程度：少発

発生量：育苗期の発生量は、平年より少なく、前年よりやや多

2 防除対策および防除上の注意点

(1) 比重選、健全種子の使用、種子消毒を徹底する。

(2) 種籾が露出していると発生しやすいので、厚播きは避け、覆土を十分に行う。

(3) 育苗施設内の換気に気を付け、過湿にしないようする。

- (4) 育苗施設内や周辺に放置してある稲わらや籾がらは伝染源となるので、除去する。
- (5) 発病の恐れがある場合や発生を確認した場合には液剤、水和剤で防除する。育苗期の苗いもちを抑える他、本田の葉いもちの抑制にも効果がある。
- (6) 温湯消毒を実施する場合は、必ず乾籾を使い、60℃10分または58℃15分の処理温度、時間等を適正に行う。また、発芽率の低下を防ぐために、消毒後は速やかに冷却する。消毒後すぐに播種しない場合は、保管場所の衛生管理を徹底する。
- (7) 育苗ハウス等で、野菜等の後作物を栽培する場合は、育苗箱処理剤の播種時使用をしない。また、移植当日に使用する場合は、ハウスの外で散布処理を行う。

病害虫名 各種苗立枯病（糸状菌）

1 予報内容

- 発生時期：初発は4月中旬
- 発生程度：少発
- 発生量：平年より少なく、前年並み

2 防除対策および防除上の注意点

- (1) 比重選や健全種子の使用、種子消毒を徹底する。
- (2) 床土のpHは、4.5～5.1程度とする。
- (3) 前年発生を認めた育苗箱や古い育苗箱は洗浄消毒する。床土消毒は病原菌によって防除剤が異なるので注意する。
- (4) 極端な早播き、厚播きを避け、育苗ハウスの温湿度管理（夜間5℃以下、昼間25℃以上にならないように管理し、多湿を避ける）に留意し健苗育成に努める。

病害虫名 褐条病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病

1 予報内容

- 発生時期：初発は4月下旬
- 発生程度：少発、局中発
- 発生量：平年並み、前年よりやや多

2 防除対策および防除上の注意点

- (1) 比重選や健全種子の使用、種子消毒を徹底する。
- (2) 床土のpHは、4.5～5.1程度とする。
- (3) 催芽、出芽が高温（30℃以上）にならないようにする。
- (4) 極端な早播き、厚播きを避け、育苗ハウスの温湿度管理（夜間5℃以下、昼間25℃以上にならないように管理し、多湿を避ける）に留意し健苗育成に努める。また、灌水に湖沼や河川の水は使用しない。
- (5) ハトムネ催芽器を使用すると褐条病の発生が多くなるので、催芽温度の管理、水のコまめな交換、使用後の洗浄等の対策を徹底する。
- (6) 温湯消毒は褐条病への効果が不十分であるので、苗立枯病にも効果が期待される食酢等の対策と組み合わせる。
- (7) 発病後の防除薬剤はないので、上記の対策を徹底する。

【大麦関係】

病害虫名 赤かび病

1 予報内容

- 発生時期：初発は4月中旬
- 発生程度：少発、局中発
- 発生量：平年、前年より多い

2 防除対策および防除上の注意点

- (1) 1回目の防除適期は開花始め～開花盛期である。防除適期にあたる出穂5日後頃に1回目の防除を行なう。また、1回目の防除の7～10日後に必ず2回目の防除を行なう。
- (2) 耐性菌の発生を遅らせるため、1回目と2回目は、同一薬剤を使用しないよう努める。
- (3) 出穂期以降に気温が高く降雨が続くと、多発する。また、出穂前からの気温が高く推移すると出穂が早まるため、防除適期を逃さないように圃場を巡回し、準備しておく。

病害虫名 雲形病

1 予報内容

発生程度：少発

発生量：平年より多く、前年より少ない

2 防除対策および防除上の注意点

(1) 本病は進展速度が遅いので、局部発生であれば防除の必要はない。

(2) 発病の多い圃場では、止葉展開期～出穂期に薬剤を散布する。

(3) 種子伝染するので発病圃場からは採種しない。

病害虫名 株腐病

1 予報内容

発生程度：少発

発生量：平年より少なく前年並み

2 防除対策および防除上の注意点

(1) 麦の生育量が多い圃場や連作圃場は発生が多くなるので、注意深く観察し発病を認めたら、発生初期に薬剤を散布する。

[果樹関係]

果樹名	病害虫名	予報内容			防除対策および防除上の注意点
		発生時期	被害程度	発生量	
ナ シ	黒星病	初発： 4月下旬	少発 (局中発)	平年：並み 前年：やや多	1)脱苞期～交配直後にかけて重点防除する。 2)同一薬剤の連用は避ける。
	黒斑病	初発： 5月中旬	少発	平年：並み 前年：やや多	1)脱苞期～交配直後にかけて重点防除する。 2)同一薬剤の連用は避ける。
	赤星病	初発： 4月下旬	少発	平年：並み 前年：やや多	1)中間寄主のビャクシン類は、できるだけ広範囲に伐採する。 2)防除は、開花直前から5月上旬にかけて行う。
ウ メ	かいよう病	果実初発： 4月下旬	少発 (局中発)	平年：やや多 前年：並み	1)果実直径10～15mmの時期に薬剤散布して予防する。 2)果実肥大期に強風雨や降雹があった場合は、2日以内に抗生物質剤を散布する。 3)耕種的防除として防風対策を必ず実施する。
	黒星病	果実初発： 5月中旬	少発 (局中発)	平年：並み 前年：並み	1)感染から発症するまでの潜伏期間が約30日と長いため、防除間隔が開き過ぎないように、薬剤を散布して予防する。
	アブラムシ類	加害初期： 4月中旬	少発 (局中発)	平年：並み 前年：並み	1)展葉初期～生育期に、かけ残しがないよう薬剤を散布する。
	ウメシロカイガラムシ (第1世代幼虫)	幼虫発生初期： 5月1半旬	少発 (局中発)	平年：やや少 前年：並み	1)4月20日頃から越冬雌成虫の産卵および幼虫ふ化時期を観察し、適期に薬剤を散布する。 2)越冬雌成虫の着生が多い樹では、ふ化初期とその7日後の2回、薬剤を散布する。